

山行報告書

通算山行NO	NO・188S	報告者	加藤 秀子
年 月 日	'00年 8月 9日(水曜日)～	年 8月12日(日曜日)	
山 行 名	'00 夏山合宿	天 候	快晴
山 名	信濃俣河内～茶臼岳(2694m)		
この山のセールスポイント	<p style="text-align: center;">ロマンを秘めた幽谷の 素晴らしい溪谷美に絶句！！</p>		
コース 及び タイム	/10 裾野13:00 ⇨富士13:30 ⇨信濃俣林道終点テン泊地19:00 /11 起床・出発～4:00/5:30 ～第一ゴルジュ9:00～第二ゴルジュ10:30 ～第三 ゴルジュ14:00 ～巨岩帯～1755m15:00(テント泊)		
標 高 差	△S 800 ~T 1755 ÷ 950 m	体 力 度	1・2・3・4・5・⑥
	▼T ~G = m	技 術 度	1・2・3・4・5・⑥
走行距離	~ = km	展 望 度	1・2・3・4・⑤・6
参 加 者	CL 後藤 隆徳 53	第一ゴルジュと第二ゴルジュはさすがだった。	
	高岡八千代 62	とにかく長い行程でバテた。疲れた。でも焚き火はイイ。	
	後藤 歌子 55	流された時は恐かった。今度は泳げるように頑張りたい。	
	加藤 秀子 51	沢登りの一番の楽しみは、その先に何があるかとワクワクする事だ	

一日目 (8月9日)

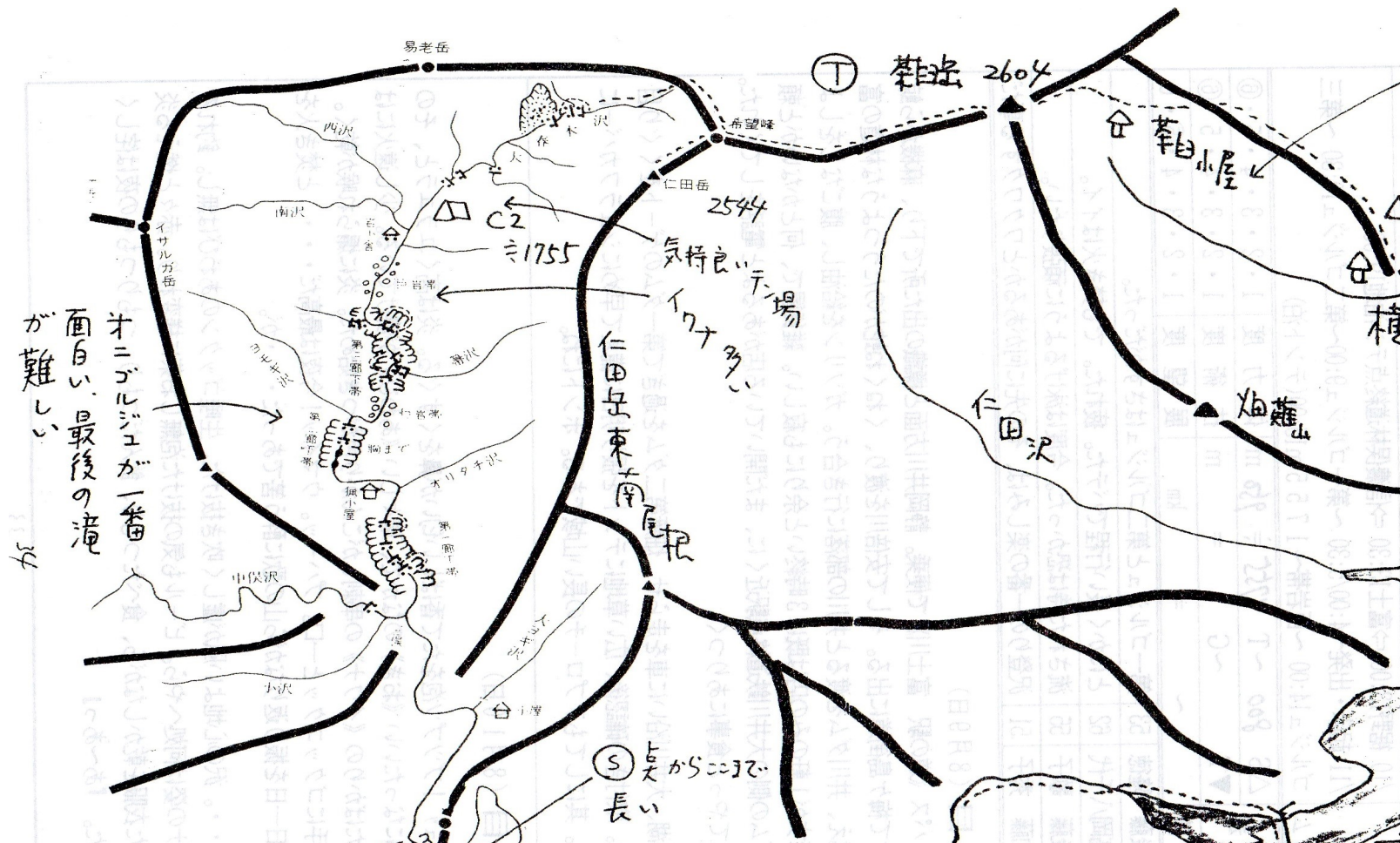
国一バイパス《道の駅 富士川》で便乗。静岡井川方面と標識の出た所で下り、麻機から鯨ヶ池を抜けて梅ヶ島街道に出る。そして安倍川を渡り、くねくね蛇がのたうつような林道の富士見峠を越え、井川ダムを渡ると井川の部落に行き合う。ガソリンを給油し、腹ごなしをしようとして店を探すが1軒のみの店は既に3時終いと余りにも寂しい。雑貨屋で、何とかないかと頼むと井川ダムの側の大井川鉄道終点駅近くに、まだ開いている店があるよと電話をしてくれた。Uターンしてやっと食事にありつく。

再び井川湖、大井川沿いに車を走らせ、畑籬第二ダムを過ぎて第一ダムのゲートをくぐり目的地に到着。取付きの確認後、広い草地にテントを張り明日に備えて早めにシュラフカバーにもぐり込む。其にしてもアプローチの長い山域である。ホントにね。

二日目 (8月10日)

ジュッ ジュッ！プツプツ泡をたて香ばしい匂いが鼻をくすぐる。炎は高くユラユラと、その下で真っ赤になったいい《おき》のなかで、瑞々しい《あわび》が焼けている。少し遠火にはCLが釣ったばかりの《イワナ》の串刺しがこんがり色がつき始めた。炎に煽られ喉が乾く。ビールを片手にゴクッゴクッと一口。プハーッ。ウマイッ！今夜は最高だ……。と焚き火を囲んで、今日一日を振り返りながら山の歌に酔う筈であった……。が。

しかし……。沢の心地よい風が虚しく吹き抜けた。生唾ゴックンのあわびは無し。釣れる予定のイワナの姿は何処へやら。ビールも気の抜けた泡無しお茶に様変わり。赤々と燃える炎の前で濡れた衣服を乾かしながら、食べたつもり、飲んだつもり、つもりつもりの夜は侘しくふけていった。『あ～あッ』



テントを撤収し、朝食を済ませ、沢の身支度を整える。初めての縦走に荷物は、軽量化を図り、テントにシュラフカバーのみ。着替えはオーロンの下着の上下と靴下1枚。食事は水が豊富にあるので水で戻す物で徹底。果物、野菜はなし。唯一の楽しみはCLが釣る《イワナ》だけである。その為、塩だけは極上のあら塩を持参した。とにかく12~14kg位に抑えたザックを背負い、古くは甲信地方との交易道と言われるロマンを秘めた幽谷にいざ出発。

信濃俣林道終点手前右側の踏み跡を辿り、畑薙湖の左岸に移るえらく簡素な吊り橋を渡る。途中、林の中に見事な《たまごだけ》を見かけた。踏み跡を頼りに15分、それも消えかけた頃、きつい斜面をズルズルと下って一気に広い河原に出た。いよいよ遡行開始だ。真ん中を流れる川の水は速い。だが堰堤までは『キャッ。はや〜い』なんて可愛らしい声を出しながら渉を楽しむと、やがてゴルジュ帯に突入した。葉梢がふりかかり、石にぶつかった飛沫が白い泡をふき流れは更に強くなった。丹沢で 渉の訓練中、流れに足をとられ怖じ気づいている高岡を間にはさみ4人でスクラムを組む。目前にニホンジカが水面を蹴散らしてアッという間に対岸の林に消えた。『徒渉はああいう風にやるもんだ』とCL。一同黙して語らず。

流れは大きく南に変えてアシ沢の注入、西河内の落ち込み、本流は北に戻り大ヨギ沢の落ち込みと蛇行する沢の徒渉を繰り返すと三叉に出会う。右俣の本流に入り、やがて第一ゴルジュに突入。巨岩と倒木が折り重なった溪相に、血管が全開し脈打つ。いよいよだ。釜の水際をへつり、徒渉、又へつりと夢中で繰り返すと急に明るいゴーロに飛び出た。オリタチ沢を見送ると流れは左に曲がり、少し先の右岸に小屋を見かける。

沢は再び狭くなり第二ゴルジュに入る。川面に覆いかぶさる緑の葉梢、狭く切り立った黒々とした岩の間を、怒ったように白い泡をふきうねり奔走する流れ、正に幽谷の芸術的景観美だ。狭い廊下を徒渉で繰り返す、最後の小滝はショルダーでといきたかったが、つるつるの岩は手強く結局左岸を高巻き5~6mの懸垂下降で沢床へ戻った。この時、沢床に下りる岩の足場をみかけた加藤と高岡が『ザイル使わなくても大丈夫みたいですよ』と言った途端、CLにモーレツに怒られた。然りである。そして加と一が対岸に渡り、お助けヒモで歌子が渡り最後に高岡だ。渡ったと思った瞬間、足が届かず身体が流された！2~3m先は滝になっている。『ヒモを離さないで！』と命綱を思いっきり引っ張る。勢いのいい水流に身体を取られながらも必死で這い上がり事無きをえた。後であんな事を言った後なのでバツが悪かったと反省していた。

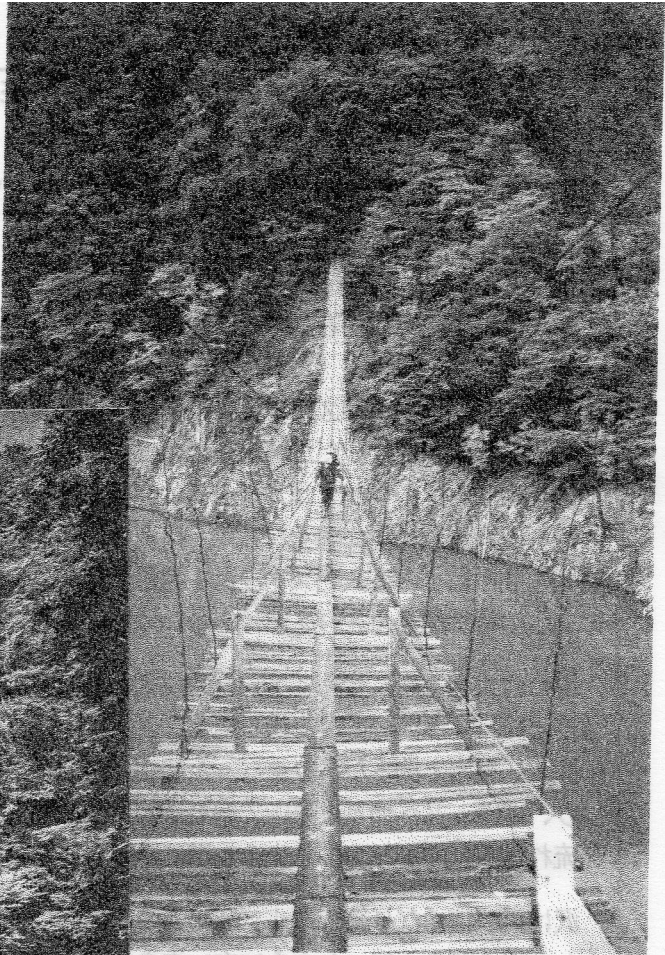
巨岩帯を更に遡ると、核心部の第三ゴルジュを迎える。石を乗り越え、釜を高巻きへつりと繰り返す。滝と淵が交互にあらわれCLの目が妖しく光りだしてきた。水面に魚影が映った。口に手をあて『シッー』と合図。静かに竿を組立て毛バリを水中に落とす。駄目だ。竿を持ち歩きながら恰好の場所で竿を落としてみるが上手く釣れない。今度は持参した《ミミス》を試す。《ミミス》担当はグニグニ虫が大嫌いな加と一だ。手に持って渡す時、背中に氷が走る。直ぐ付けられるよう予備の《ミミス》を手に持って歩いたが、手の平をくねっとのたり動く感触に生きた心地はしなかった。でも一匹でも釣れたら今夜のおかずになると耐えた。然し・

両岸の立ち上がった壁になった。竿をしまいCLがヒョイと対岸に飛んだ。岩壁はツルツルでホールドがない。簡単のように見えて難しい。真似をして対岸に飛び移るがあとチョイの手前でドボン。今度は歌子が流された。足元がつかない流れの中で、泳げない歌子はあわててお助けヒモを手から離してしまった。対岸に掴まろうと喘ぐ。幸い一番下手にいた高岡がサッと

(上) こわいこわい吊橋

(中) まだ廻行は始まったばかり、西河内出合にて

(下) 明るい笑顔の女性達





類丁しお申さ手
ヒ三葉のうらら
や髪、ぶらぶら
ハ老くさおし
でコ葉言の「コ
断ノ太おコ照所
そとそとコ間ノ
専食の米銀計ノ
白くそのコ照所



ノハ野方の
おもて
おはし集
るさよ
おの
おはき



丸太のぼり、へつり、徒渉。
シャワー、など
様々な困難が
待ちうける

手を伸ばして歌子の身体を掴んだ。助かった。ホッと胸をなで下ろす。巨岩の間を通り抜け、どうやら第三ゴルジュも突破した。行程が長く、緊張の連続したなかで高岡と歌子は随分疲れたようで、段々と足が重くなってきた。

しばらく歩いていくとテン泊地に丁度良さそうな河原にぶつかる。『今夜は此处でテン泊だ』CLの言葉にワーッと歓声が上がった。早速乾いた物に着替え、明るいうちにと薪を集める。河原には太い潤れた木がゴロゴロと転がり、本人曰く「火付け名人」の加と一が種起こし。瞬く間にメラメラと炎が上がり、冒頭の展開となった。飢えた喉の乾きに耐えながら、つつましく乾燥米の食事にありつくが、『あー。ビールが飲みたい』と寝るまで言っていた御仁がいた。河原でのテン泊は初めてだが、なかなか味わい深いものだった。焚き火も良かった。

装備と食料の総括

装備・・・○ザイルは20m×2本で正解だった。

○ウエットスーツは暖かく水の冷たさを感じない。その為、身体が疲れない。

○ウエットスーツがない場合、やはり臍当ては必要不可欠だ。ゴム性なので暖かく脛の保護も兼ねる。

○河原での泊まりは、今回はテント持参だったが事前にタープも検討してみた。価値はあると思う。更に軽量ができる。

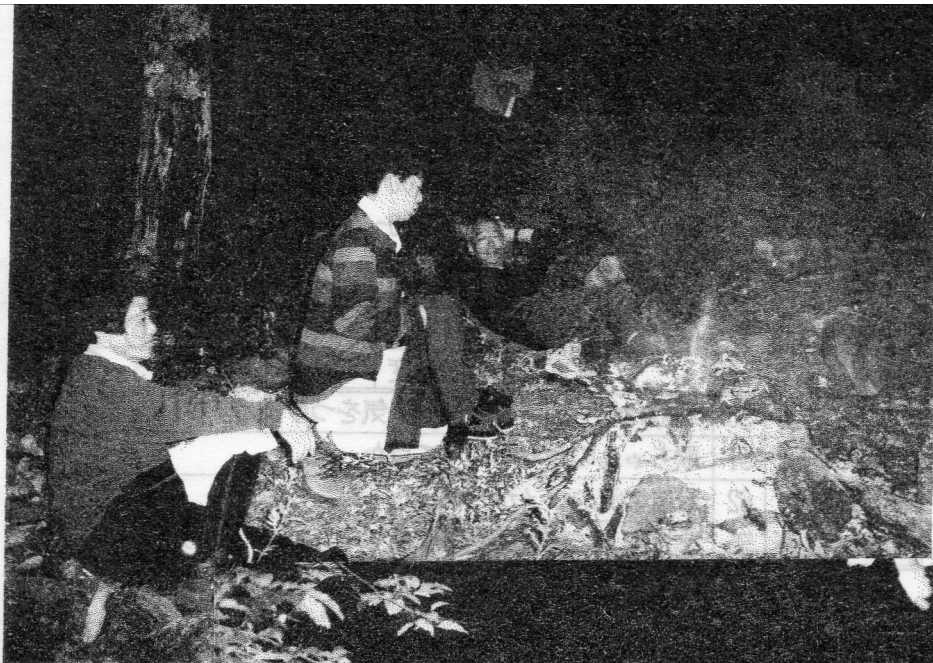
食料・・・○軽量化に徹底しすぎて、佳しい食事になりすぎた感がある。やっぱり楽しみは、食事にあると実感。やはり元気の源である。しかし食料の軽減はできた。どちらを重視するかはメンバーの体力次第か。

○粉末汁粉はいけた。疲れた身体に暖かみがジワッとしてみても美味しかった。

○ビールはやはり最低限、一人一本は欲しい。

○行動中は、お茶・水だけよりも甘味の入ったスポーツエネルギーの方が、疲れた身体にはよい？





山
 (金) 日 月 8
 (静さのり轟)
 差 高 脚
 音 爪 参



山
 音 爪 参
 1910



林火が心休まる
 南沢上流のテント場

山名	茶臼岳 (264 m)		報告者	後藤 隆徳
この山のセールスポイント	美しい源流と重厚な原生林			
8月11日 (金) コース及びタイム (曇りのち晴)	起床4:00/5:50 ~ 事故6:30 ~ 沢終了(2320m) 9:00 ~ 希望峰9:50 ~ 仁田岳10:00 ~ 希望峰 10:15 ~ 茶臼岳 11:10 ~ 茶臼小屋 12:00 ~ 横窪小屋 ~ 15:00 (泊)			
標高差	△S 1755 ~ T 茶臼岳	≒ 850 m	体力度	1・2・3・4・⑤・6
	▽T 茶臼岳 ~ G 横窪小屋	≒ 1000 m	技術度	1・2・3・4・⑤・6
			展望度	1・2・3・4・5・⑥
参加者	CL 後藤 隆徳	53	事故は易しい所で起きる。気をつけよう。	
	加藤 秀子	51	歌ちゃんのケガが軽くて良かった。	
	高岡八千代	62	最後の沢のツメが一番良かった。	
	後藤 歌子	55	ケガをして皆に迷惑をかけて申しわけなかった。	
三日目	<p>静かな夜は明けた。夜半2時頃まで燃えていた焚き火もさすがに消えていた。シュラフカバーだけが全く寒くなかった。昨夜の残りのご飯をベースにオシヤを作り口に流し込む。加トーは全く食べないが、これでも良く歩く。</p> <p>今日は上流で「沈」はあまり無さそうなのでウェットスーツはヤメて普通のトレパンにした。直前に購入したカヌー用のウェットスーツは思いの外良かった。身体の「冷え」が殆ど感じられない。ただ1万2千円はちょっと痛いところか。一夜の安住の地に感謝しつつ出発。</p>			
	<p>本流はこの辺りから大春木沢と名前を変える。その昔、此処には交易路がありこの辺りから急な尾根を登りつめ、易老岳に出て遠山川に達したという。それにしても、こんな険しい沢筋の難路をロクな装備もないまま、どのようにし越えたのだろうか。先人達の努力には頭が下がる思いである。振り返るとイザルガ岳に朝日が当り霧が流れていた。そしてその向こうには光岳(てかり)があった。</p> <p>朝の冷氣の中、テン場から上流は快適に登れる小さな滝が連続し気分はサイコーだった。だが昨日の疲れがあるのか歌子がやや遅れ気味だった。今朝もよく眠れなかったと言っていた。大ガレを左に見ていくと2段30mの滝が現れる。巻きは左岸だが一応近くまで見に行く。右岸も巻きそうなので少し登るが、グズグズの壁なので5m程登って引き返す。2番手を下っていた歌子が『アッ』と声を上げたかと思うと、頭をやや下にして横になりながら沢に向かって3m程落ちていった。</p> <p>沢床にドカッと落ち動かない。一瞬「やったか」と思った。すかさず加トーが寄り添う。幸いザックを下にしたので意識もあり大きなケガはなさそう。腕を下にしたので、もしや腕の骨折かと思っただけに良かったが、ただ膝下を打ったらしくジャージに血が滲んでいた。安定した所に移動してポカリを飲ませて落ち着かせる。左足スネに大きなキズが3ヶ所。1ヶ所は尖</p>			

った岩が当たったらしく深くえぐれていた。何れにしても骨折でなく良かった。三角巾で応急手当をする。荷物を皆で分け軽くしゅっくりと出発。

この上にも10mの滝がかかり右岸を巻く。徐々に水流が細くなる。源流はシラビソの中の流れだ。この辺りはサンショウウオがいるそうだが探したが見つからなかった。水流は2200mで消えた。なおもガリーをつめると流れは美しい一つの線になってシラビソの森に消えていった。2300mだった。ここが紛れもなく信濃俣河内の水源だった。楽しませてくれた感謝と安全登山を願い、8ヶの石を使い(4人×瞳)小さなケルンを置いた。右岸の森に入り、ここで沢装備を全て交換した。

全員集結し稜線に向かうと10分で希望峰から下ってくる縦走路に飛び出た。3年前の冬通った路である。希望峰に着き歌子に待ってもらい15分の仁田岳に向かう。ハイマツがあり高山の雰囲気だ。丁度、北方の雲が切れて見覚えのある台形の聖岳が姿を見せた。3人で思わず『オーッ』と声をあげる。やはり3年前の冬、苦勞して登った頂は懐かしかった。やはりモーレッツな風を経験した。

茶臼岳に立ち記念撮影をして茶臼小屋に向かう。小屋で医薬品を借りて歌子の再手当ですがロクな薬はなかった。この小屋は地元・井川山岳会に委託されているとはいえ、一応県営の小屋だ。なのにこんなものかとガッカリした。同時に、この小屋は靴を脱がないと上がれないので不便なこと。山小屋は土間があり、靴のまま行き来が出来なければ使いにくい。税金で建築されたのだからもっと使いやすくするべきだ。又、上がって手当をして良いかと問うたらイヤな顔をされた。

しかし待望のビールは600円であった。クルマユリに見える風通しの良い小屋のテラスで富士出身の主人と聖から来た3人の若人と雑談をしながら、私はガツガツと3本も飲んでしまった。ビールを飲まないと言ったと血糖値が下がって元気が出ないなど勝手な事を言いながら……。

1H程大休止しても時間の余裕があるので横窪小屋に下りる。途中、涼し気なシラビソの森の清水の湧く所に、手製の丸太のベンチがあったので思わず横になったら本当に眠ってしまい夢も見た。ビールの酔い心地が何とも気持ち良かった。以前三島登山時代、前穂右岩稜を登り誰もいない前穂の頂上で眠ってしまい、起きた瞬間何処なのか分からなかった事があったが、山での昼寝は本当に気持ち良い。

懐かしい横窪小屋に着いた。此処はやはり三島登山時代、冬の聖岳東尾根をやった以来だから22年振りである。あの時は谷川岳で逝った川口君もいたっけ。横窪小屋は小屋もテラスもガラガラで静かで良かった。まだ陽は高かったが小屋の前に陣取り、東京から来て10日間山に入っていたという、感じの良い松下ご夫妻に豆を頂いたりして又々ビールを飲んだ。青い空に長大な雲塔がニョキニョキと伸びていた。

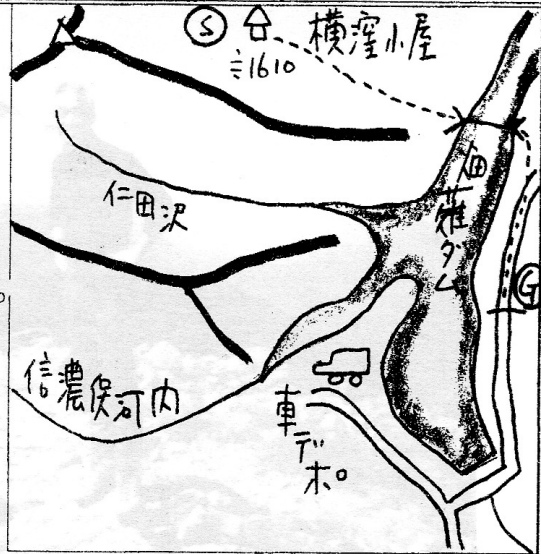
夕食後、高岡がビールをジャンジャン買ってきてくれてしたたか飲んだ。合宿も今日が最後なので開放的になった。死んだ川口君のことを思い出しちょっぴりセンチになってしまった。

8月12日(土)
コース及びタイム
(曇りのち雨)

起床5:00/5:30 ~畑薙ダム7:00~沼平ゲート7:45(後発隊10:45) ⇨白樺隊
⇨富士17:30

四
日
目

今日は車の回収があるのでゴトー(た)、加トーが先発。高岡、歌子を後発とした。「普通に飛ばして」小屋から畑薙ダムまで1時間半だった。吊り橋から加トーは空身で信濃俣河内林道終点まで車を回収。私は加トーの荷物を前に腹負って(背負うではない)沼平に着く。30分程で加トーは戻ってきた。超人である。その後も後発隊を迎えに再び来た路を戻った! 私は沼平のゲートのオヤジとケガ人がいるので吊り橋まで車を入れらせてくれと交渉。



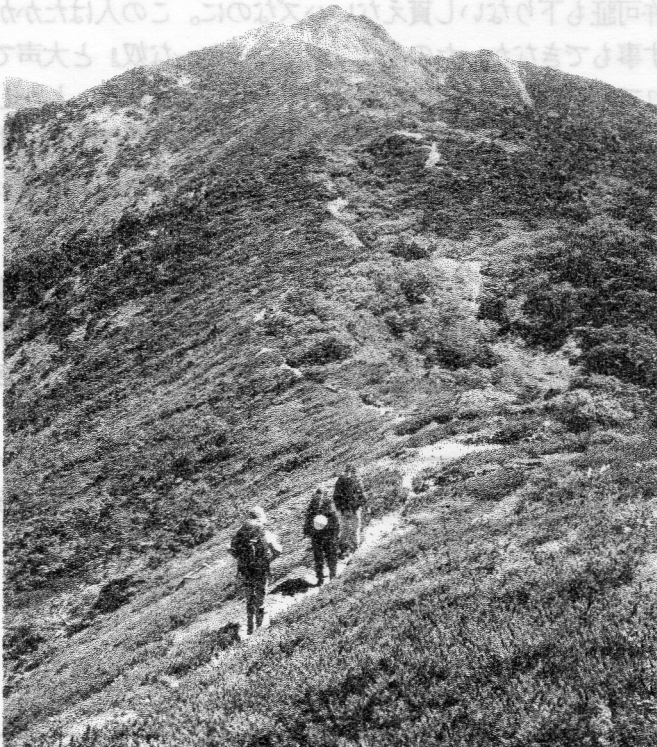
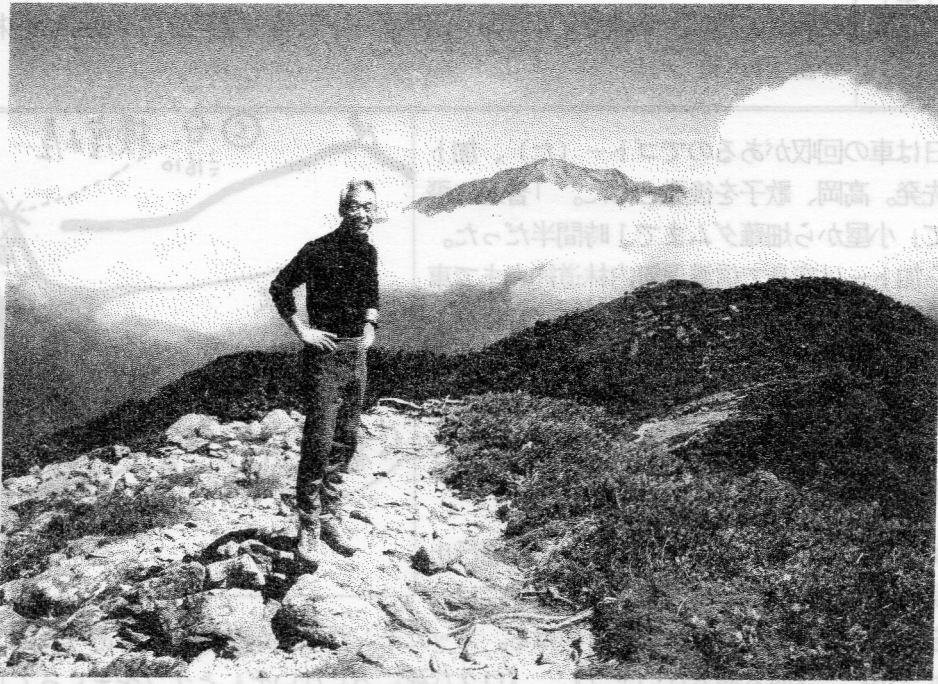
沼平ゲート
≒950

ところがこの望月というこの年配のオヤジは通行止めの信濃俣河内の林道に勝手に入るような連中には、例えケガをしていても絶対入れないと言いはる。スツたモンだしたか結局ダメであった。『この偏屈オヤジが』、『血も涙もないヤツ』、『ロクな死に方しないぞ』とケツをまくってしまった。それは確かに信濃俣河内林道は通行止めかもしれない。しかし、実際ゲートがあるわけでもないし多くの釣り人など入っている。むしろ山ヤより釣りヤの方が多いい位だ。短い間だから特にキケンな所もないし、終点に大駐車場もあるので、むしろあそこを通行止めにする事事態がオカしい。又、例えそうであり、それを破ったとしてもケガ人を助ける事とは別の問題ではないか。一方、沼平のゲートといえば実際その日、静岡の芳山の人も登山目的で通行している。本来は登山目的では許可証も下りないし貰えないはずなのに。この人はたかが15分程度、ケガ人の為に通行を許す事もできなかったのか? 『沼平のイヤ〜な奴』と大声で叫んでしまった。かって税金で造られている林道は、自由に通行出来る時代もあった。しかし林道をレース場と勘違いしていたバカ野郎が事故り、道路管理者の市や町に損害賠償を起こす事件が各地で起こった。それ以来、林道の通行はキュークツになったのだ。オヤジの気持ちも分かるが世の中、あまり杓子定規にならないことだ。

やがて歌子も下りてきた。時間は掛かった。昨日、小屋で交流した東京の松下夫妻も来たので車に乗せて白樺温泉に向かう。ここは無料の超オイシイさらさら温泉。ウレシイネー。室に入ると丁度雨も降ってきた。台風の影響である。結局、松下夫妻は富士まで送ってきた。

’00年夏山合宿はこれで終わり。イイ山だった。

1. 白樺温泉は安倍奥の例のサラサラ、ヌルヌル湯でサイコー。トンカツは安くてうまくて20ミリあり食べきれない。
2. やっぱり南は静かでイイ。来年は赤石沢をやりたい。
3. 花はいま一つでした。



(上) 仁田岳からなつかしい聖岳
向う
(下) 希望峰から茶臼岳に

主 野 主
 (日 期 日)
 2014年-2015
 0000 0000
 2014年-2015
 0000 0000
 0000 0000
 0000 0000
 0000 0000



(下) 白樺温泉 東京の
 松下さんと
 (中) 茶臼岳 頂上
 (上) 横濱 小屋にて